



 Data	2024-91
監督: 張芸謀 (チャン・イーモウ)	
原作: 莫言 (モー・イェン) 「赤い高粱」 (岩波書店刊)、「高粱酒」	
出演: 鞏俐 (コン・リー) / 姜文 (チャン・ウェン) / 滕汝駿 (トシ・ルーチュン) / 劉繼 (リウ・チー) / 計春華 (チー・チェンホァ) / 錢明 (チェン・ミン)	

みどころ

中国第5世代を代表する張芸謀 (チャン・イーモウ) 監督の活躍は、映画界のみならず、2008 年と 2022 年の北京オリンピックの開・閉会式の総合監督にまで及び、止まるところを知らない。しかも、作品は“本当に作りたい映画”から“ハリウッド進出映画”や“国威発揚映画”にまで広がり、そのすべてが大ヒットしている。

そんな彼の初期の衝撃作、『紅いコーリャン』『菊豆』『紅夢』が、2024 年の年末年始にかけて、“艶やかなる紅の世界”という統一テーマの下で、各 1 週間限定で上映されたからこりや必見!“私は 20 年前の「中国映画の全貌 2004」で初めて本作を鑑賞し衝撃を受けたが、それは一体なぜ?パンフレットには、「人間の本质は 愛や絶望といった感情の中にある」との彼の言葉が収録されているが、まさにそのとおり!それを本作で再確認したい。

原作は、ノーベル文学賞作家・莫言 (モー・イェン) の「紅高粱」と「高粱酒」だが、なぜ原題を「紅高粱」、邦題を「紅いコーリャン」に?それは、91 分間に凝縮された今作の映像を観れば誰でもわかるはずだ。

男なら誰でも美人女優が大好き!それを知り尽くしているチャン・イーモウ監督は新人女優発掘の天才だから、本作でデビューした鞏俐 (コン・リー) に注目!彼女が「中国版山口百恵」と呼ばれたのは、歌手山口百恵が女優としても大ブレイクした後だが、2024 年の今本作を観ると、若き日のコン・リーはまさにそれ。サユリストたる私にもそれが実感できた。『初恋のきた道』(99 年)以降の章子怡 (チャン・ツイイー) もいいが、やっぱりコン・リーが最高!てなわけで、2024 年の大みそかは、テアトル梅田で至福の 91 分間を!

— * — * — * — * — * — * — * — * — *

■□■テアトル梅田で「張芸謀 艶やかなる紅の世界」を開催■□■

1980年代後半に“中国ヌーベルバーク”を巻き起こした監督が、陳凱歌（チェン・カイコー）と張芸謀（チャン・イーモウ）の2人。その最初にして最強の代表作が、チェン・カイコーの『黄色い大地』（84年）（『シネマ5』63頁）とチャン・イーモウの『紅いコーリャン』（87年）（『シネマ5』72頁）だ。

私とその両作を含め、計 34 本の中国映画を一気に鑑賞したのは 2004 年 6/19 から 7/30 まで、シネ・ヌーヴォが「中国映画の全貌 2004」を開催してくれたおかげだった。それから 20 年！テアトル梅田が、なぜか 2024 年の年末年始に、「張芸謀 艶やかなる紅の世界」を開催！もっとも、各作品とも 1 週間だけの限定上映だから、本来ならスケジュール調整が大変。しかし、年末年始ならそれはどうにでもできるから好都合だ。何としても、これを優先して 3 作品とも必見！

■□■『紅いコーリャン』『菊豆』『紅夢』の3本。こりゃ必見■□■

ここで上映される作品は、チャン・イーモウの初期を代表する次の3作だからこりやす
ごい。



■□■原作は莫言！彼の小説を契機に、彼との対談が実現！■□■

私は2011年7月26～27日、ノーベル文学賞を受賞する直前の中国人作家・莫言氏と私の事務所で対談をし、有馬温泉で一泊して“温泉談義”と周辺の散策をした体験を持っている。それを企画し共に行動したのは2009年以降、神戸国際大学の教授を続けている毛丹青氏だ。その詳細は『がんばったで！40年』（2013年）の巻頭特集『莫言さんノーベル文学賞おめでとう（「事務所だより」から）』を参照してもらいたい。同企画がトントン拍子で進んだのは、2004年6月に『紅いコーリャン』を鑑賞した直後に彼の小説『紅いコーリャン』を読破していたためだ。

私が友人の留学生の紹介で、毛丹青氏とはじめて知り合ったのは2008年4月。「中国人作家『蘇童（スー・トン）』が行く関西の旅 歓迎座談会」への出席を契機としたものだ。その後、①『取景中国』（09年）出版に向けての上海旅行（08年8月）、北京・上海旅行（09年3月）、②『取景中国』出版と広報のための上海ブックフェアへの出席（09年8月）、③『華東理工大学外国語学院』での対談（09年9月）、④『定遠号プロジェクト』の始動に伴う大連・威海・青島旅行（10年3月）等々、次々と広がった。

他方、莫言氏は1994年にノーベル文学賞を受賞した大江健三郎氏が、「今後ノーベル文学賞に最も近い作家」として挙げた中国人作家だ。また、若き日の毛丹青氏は、莫言が1999年に発表した『豊乳肥臀』の翻訳刊行を機に初めて来日した時、通訳として全日程に随行した人だ。したがって、この2人は古くからの親友だが、そんな毛丹青氏の個人的ツテで、莫言氏が2011年7月26日に来阪することになった際に、“特別企画”として実現したのが、坂和事務所における莫言氏との対談と、温泉好きの莫言氏を私が有馬温泉に一泊旅行にご招待しての“有馬温泉談義”だ。

私はその対談に向けて、当時日本で出版されていた彼の小説をすべて購入し、それを読破した。しかも、それはメモを取りながらのものだったから、かなりの勉強量だった。莫言氏の小説は、彼の性格と同じように（？）大らかだが、神秘性の強いもの。もともと本作の主人公が、いたずら心（腹いせ？）から高粱酒の樽に小便をしたら、何と最高的高粱酒が生まれたという話は、半分嘘のような、半分ホラのような・・・？ところが、小説ではもちろん、本作でもそんな話が全く違和感なく、逆に説得力を持って描かれているから、すごい。もっとも、その時代が、戦後80年間平和を守り続けている現在の日本のようであればよかったが、1920年代末期の中国の山東省の村に日本軍が侵攻してくると・・・。

■□■彼我は同世代！戦争観・世界観は約15年のズレあり！■□■

チャン・イーモウは1950年4月2日生まれだから、1949年1月26日生まれの私とは1学年違いの、ほぼ同世代。日本で言えば2人とも団塊世代だが、10代後半の文化大革命の時代を農村や工場で働き、文化大革命が終わり再開した北京電影学院に彼が入学したのは1978年。そして卒業したのは1982年、本作で監督デビューしたのは1987年だ。したがって1967年に大学に入学し、1971年10月に司法試験に合格し、1974年4月に弁護士

登録した私とは、その戦争観や世界観において約 15 年のズレがある。1949 年（＝昭和 24 年）生まれの私は、日本では“戦後生れ”と言われている。そして 1947 年 5 月 3 日に施行された平和憲法の下で育った上、幸いなことに、戦争に巻き込まれることなく、平和かつ高度経済成長と長寿化の中で実現した“戦後 80 年”の中で、75 歳を迎えている。

しかし、1950 年に中国で生まれたチャン・イーモウは、鄧小平による 1980 年代の改革開放政策の中で映画監督として大飛躍を遂げたが、中国大陆に侵略戦争を仕掛けてきた大日本帝国に対しては、当然少年時代に「日本鬼子（リーベングイズ）の教育を叩き込まれていたはずだ。したがって、1937 年 12 月に起きた、いわゆる「南京事件」における日本軍による 30 万人の大虐殺説も、少なくとも少年時代には当然のように信じ込んでいたはずだ。

そんなチャン・イーモウ監督が、莫言の中編小説「紅高粱」と「高粱酒」を原作として初監督した本作の時代設定は 1920 年代末、舞台は山東省の小さな村。すなわち 1931 年 9 / 18 に起きた「満州事変」の直前だ。本作前半は原題を「紅い高粱」、邦題を「紅いコーリャン」としたタイトルどおりのストーリー展開だが、後半から突然、銃剣を持った日本兵が登場してくると・・・？なるほど、なるほど。私と彼は同じ世代ながら、その戦争観や世界観には約 15 年のずれあり！そのことを真正面から突きつけられてくることに・・・。

■私ハサユリスト！張芸謀ハ中国の山口百恵にゾッコン！■

1949 年生まれ私ハ、1960 年代半ばからはじまった吉永小百合×浜田光夫のゴールデンコンビにハマリ、サユリストの代表を自称していた。それに対して、1967 年～76 年まで文化大革命の嵐が吹き荒れた中国で、不遇の少年時代を過ごしたチャン・イーモウハ、文化大革命の終了から 10 年後の 1987 年に本作で監督デビューするについて、そのヒロイン選びにはかなり苦労したらしい。

パンフレットには、「作品の重要な役である『私の祖母』となる九児役の選出はかなり難航したが、当時、中央戯劇学院演技科 2 年生だった鞏俐（コン・リー）や史可（シー・クー）が候補となり、何度かスクリーンテストをした上で最終的に鞏俐が選ばれた。」と解説されている。本作から始まったチャン・イーモウとコン・リーのコンビハ、中国百花奨最優秀助演女優賞を受賞した『ハイジャック台湾海峡緊急指令』（89 年）、中国百花奨最優秀主演女優賞を受賞した『紅夢』（91 年）、第 13 回中国電影金鷄奨最優秀主演女優賞と第 49 回ヴェネチア国際映画祭最優秀主演女優賞を受賞した『秋菊の物語』（92 年）と 1995 年の『上海ルージュ』まで、公私に渡って続いたが、さてその後は？

1949 年生まれ私ハサユリストを自負しているが、サユリストとは女優吉永小百合をこよなく愛するファンのことだ。それに対してコン・リーハ「日本の山口百恵」と呼ばれ、日本でも多くのファンを持っているが、歌手山口百恵が女優としてデビューし、1974 年の『伊豆の踊子』から、彼女は後に夫となる三浦友和とのコンビで『潮騒』（75 年）、『絶唱』（75 年）、『風立ちぬ』（76 年）、『春琴抄』（76 年）、『泥だらけの純情』（77 年）等に次々

と出演したが、これは吉永小百合が浜田光夫と共演した作品とほぼ同じライン。したがって、私とチャン・イーモウは同世代だが、女優観でも、約10年の違いがある。

■映像美に注目！張芸謀のこだわりは黒澤明と同じ！■

日本の国旗は「白地に赤く、日の丸染めて」だが、中国の国旗「五星紅旗」の意味は？それはともかく、中国のカラーといえば赤。これは1921年7月の誕生当時から赤を党の公式カラーとした中国共産党が、1949年10/1に新中国＝中華人民共和国を建国したためだ。

チャン・イーモウ監督の第3弾『菊豆』は、劉恒（リウ・ホン）の原作に基づくものが、主人公・菊豆が金で買われていく嫁入先を、農村から染物屋に変更したことによって、赤、青、黄色等の原色に染められていく布の美しさが、大きな染物屋のセットと相まって強調されていた。また、嫁ぎ先のじじい（楊金山）が死亡した際の葬儀風景では、白色を強調した演出が強烈だった。そして最後は、染物屋自体が真っ赤な炎に焼かれていく中で映し出される狂気と化したようなヒロイン菊豆の姿だったから、そんなラストで強調された赤色も強烈だった。

そんな“色彩使いの魔術師”ともいえるチャン・イーモウ監督が、世界をあつと言わせた“赤を基調とした色彩美”が、本作では至るところで強調されているので、それに注目！もちろん本作は1987年に中国で公開された作品だから、今ドキの明るく鮮明なスクリーンではなく、全体的に薄暗く、ある意味でカラーではなく、白黒映画と思えるような色彩使いが特徴だ。ところが、冒頭に映し出される花嫁の衣装は？また、風に吹かれる中で浮かび上がる高粱畑の色は？そして、何よりも強調されている夕陽の真っ赤な色は？もっとも、本作前半は花嫁の強奪戦（？）というヤバイ事件はあっても、基本的に高粱酒造りは順調に進み、わけのわからない形で結ばれた結婚生活も順調に進んでいたが、日本軍の侵攻が始まると、事態は一変！チャン・イーモウ監督が強調する赤は、人間が流す血の色となり、銃火が上げる炎の色になっていくのでそれに注目！

日本の巨匠黒澤明監督は、CGのない時代の撮影にとんでもないこだわりを示したから、製作費がいくらあっても足りない現場が続出したそうだが、そんな映像美へのこだわりは30代でデビューした本作のチャン・イーモウ監督も全く負けてはいない。あの夕陽を撮影するために彼はどこまでこだわったの？そして、あのシーンをどうやって演出したの？また、瓶の中に高粱酒を注ぎ込み、それに火をつけて投げれば、今風の火炎瓶と同じ効用を持つのは当然だが、あの時代、あの地方で、あの主人公たちがそれをどうやって思い付き、それをどうやって実践したの？そしてまた、それをチャン・イーモウ監督はどのようにこだわって撮影し、あの日本軍との戦いの映像美を演出したの？

そんな目でしっかりとチャン・イーモウ監督のデビュー作の、赤を基調とした映像美をしっかり確認したい。

2025（令和7）年1月6日記